こどもの國

3

詩の特輯

香川兒童文化研究會

みんなのれのれ

瀧口はるを

吹雪だ　吹雪だ
野も山も
暮れる吹雪の長いみち
みんな　のれのれ
　ぎつとろこん
こどものくにの
　馬車がゆく
おーい　おーい
里の子よ
明るい花の峠みち
みんな　のれのれ
　ぎつとろこん
こどものくにの
　馬車がゆく

もくろく（詩）

みんなのれのれ……瀧口はるを……1
村はシーンとしていた……與田　凖一……2
雪の夜……小西　尚……4
ぺちやくちやのおつさん……野田　青歩……6
奈良から……田中　克己……8
霜の朝……土田八重子……10
山彦とたんぼ……鳴原　一穂……11
春の海……新田左武郎……12

かじやのフイゴ（童話）……小出正吾　次田保……14

児童詩……18
短歌……54
俳句（冬果選）……56

グレテルとハンセル（童話）……グリム　森三郎　譯……59

あとがき……

村はシーンとしていた

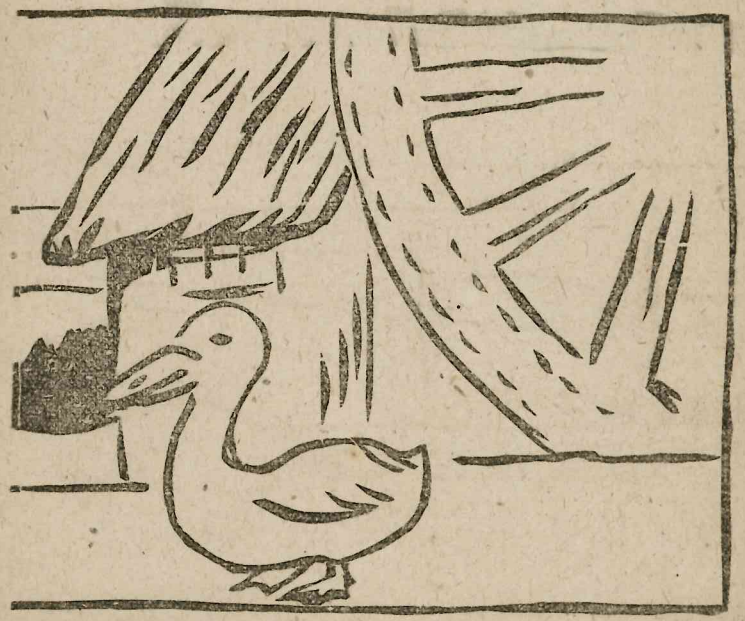
奥田準一

1

村はシーンとしていた。
おぢさんはどてらを着て
坐つていた。

2

村にはジーンジーン
モーターが米をながしていた。
白いしずかな
米のながれる音だつた。
そしていもの匂いと
竹を切る音。



3

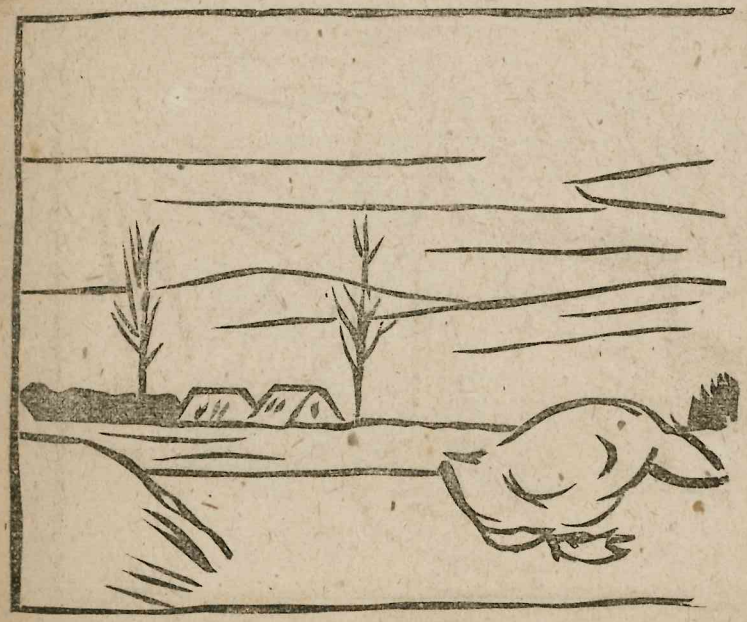
ひよろながおぢさんだつた、
おかあさんの弟だつて。
ゾロゾロをおたべと言つた、
うどんのことをゾロゾロだつて。

4

村はシーンとしていた。
もやの中をかえつて行つたのは
ばくろうさんだつて。

5

村はシーンとしていた。
電気がついた。

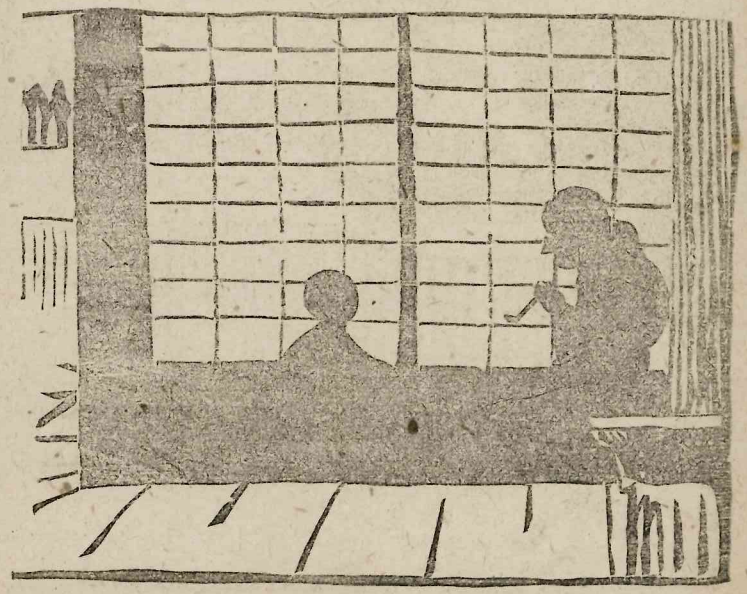


雪の夜

小西 尚

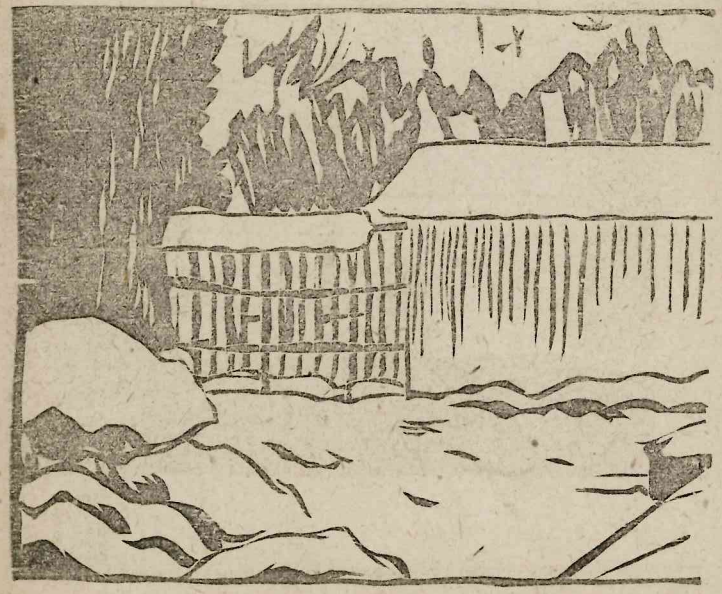
シャンシャンシャラリコ
シャンシャラリ
雪の降る夜にじいさまの
昔語りをききました。
おいらがおまえの年頃にや
あずきあらいの狸がいて
背戸の小みぞでシャンシャラリ
青い火ともしてシャンシャラリ
「いたずらしてたのその狸」
いや、かわい奴だよシャンシャラリ

シャンシャンシャラリコ
シャンシャラリ
雪の降る夜はじいさまの
昔語りもはずみます



おいらが若いあの頃にや
月見だんごに花見酒
花にうかれてシャンシャラリ
五文でよかつたシャンシャラリ
「ゆめではないのその話」
いやほんとうさシャンシャラリ

シャンシャンシャラリコ
シャンシャラク
雪の降る夜はじいさまの
昔語りがつゞきます
おいらあの頃ハイカラさ
村に一つの自轉車で
峠かけたぞシャンシャラリ
すましてのつたよシャンシャラリ
「今ものれるのおじいさま」
うまいもんだよシャンシャラリ

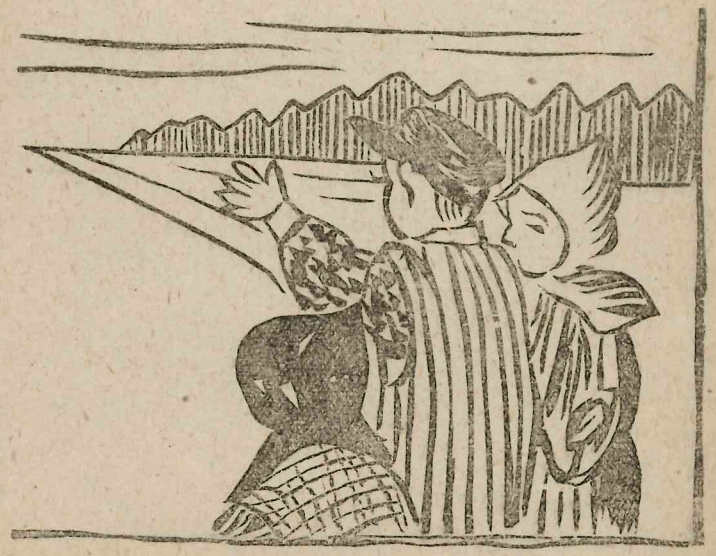


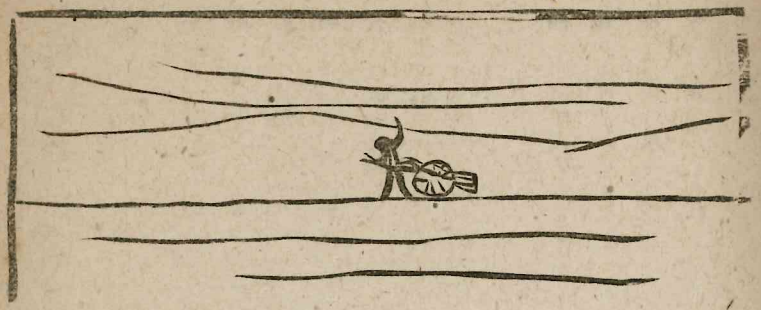
ぺちやくちやの
おつさん

野田青歩

ぺちやくちやのおつさんは
私の村の村はずれ
おばあさんと二人で住んでいる
風船や繪本を賣り
のこの目立もする
あつてみるとヒンガラメだつた

ぺちやくちやのおつさんは
目口して手まねが上手
おどることがすき
車をおしてやつて來る
子供がわつととりまいて
ものはあまり言わん方だつた





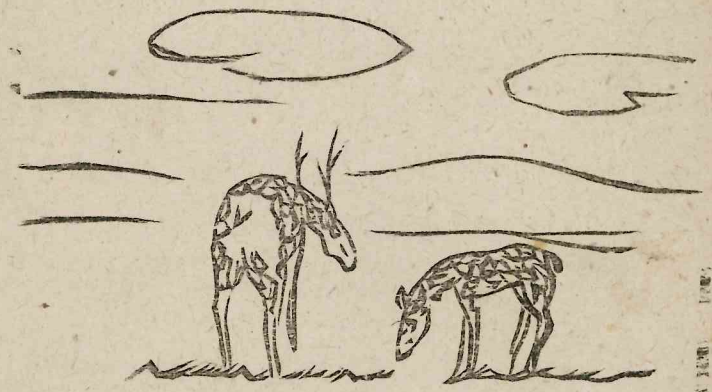
おつさんが動くと
こどもたちも動く
止ると、止る
話かけたり　かけられたり
前になり後になりついてゆく
しまいにおつさんが手を上げて
子供たちも手を上げて
——お別れする、

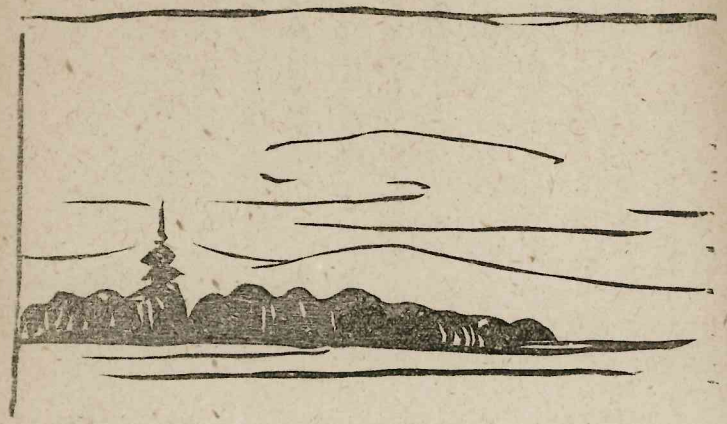
ぺちやくちやのおつさんは
子供に好かれ
大人に笑われるおつさん
私が用事で行つてみると
風をひいてフウ〳〵ねていた
年は七十だそうだ
死んだら
ごくらくへ行ける人のような氣がする

奈良から

田中克己

おぢさんのいる町は
藤原鎌足をまつつた多武峰神
社へゆく道で
吉野の杉を材木にする工場の
たくさんある町です
町はずれに出ると
うねび　みみなし　あまのか
ぐ山
楠木正成のたてこもつた
金剛山などが見えます
ゆうべ山々には雪がふり
けさはたいへんきれいです





奈良のまちとは大分はなれて
いますが
おいでになつたら
寄つてください

もつとも春日神社の鹿は
ずいぶんへりました
殺してたべた人がいるのです
——ひどい人ですね

いまに汽車がふえて
自由に旅行が
できるようになれば
鹿もきつとふえますから
きつとあそびにいらつしやいね

霜の朝

初五

土田八重子

寒い朝
父と母と三人で築港へ急ぐ、屋根にも、木にも一ぱいしもがおりているさびしい町筋だ
ここに私たちの家があつたのに焼けてから――いろんなことがあつた。
父は大阪へ行つたり、高松へ來たり苦しい思いで働いて下さる。三人ともだまつて道を急ぐ。――ふつとあの靜かなしもの中へ、とけこんでいきたいと思う
父は又、いつかえることか白いしものきびしいつめたさが、胸にひろがつて、だまつて道を急いで行つた。

（高松市栗林校）

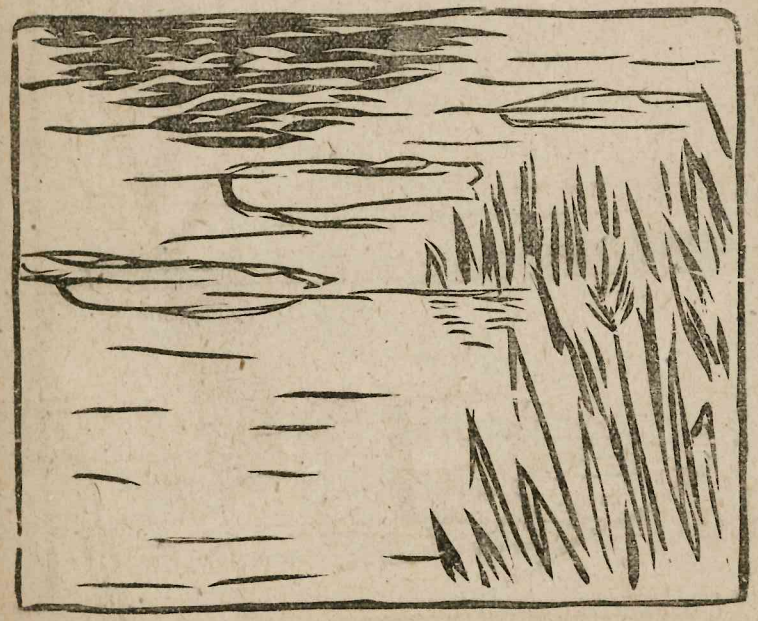
山彦こたんぼ

鳴原一穂

おうい　みんなこいよう――コイヨウ
かえるのたまごだよう――ダヨウ

はざまのたんぼに
水がたつぷり　ゆつたり
どじようもいる
Sの字になつて
古くぎのようだ

たんぼは
空がうつつてて
がらすばりだな
そしてこのがらす匂うな
あまいくすりのように匂うな



春の海

——花子と太郎——

新田左武郎

海のむこうに島がある
島のむこうに海がある
どこまでつづく島と島
どこまでつづく海と海

×

花子おまえは赤い舟
太郎おまえは白い舟
赤い舟には母さんが
銀のかがみと桃の枝
白い舟には父さんが
紺の帽子と金の斧。

×

舟がでてゆく春の海
夢がよぶよぶ青い海。

×

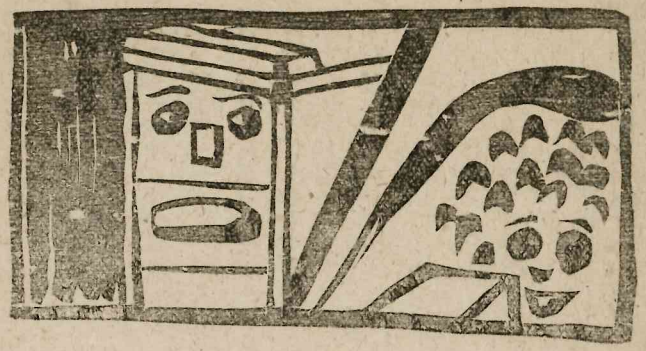
太郎よ
花子よ
よくおきき。
島へついたら
爺ちゃんが
青い大きな智慧の實を
きつと二人にくれるだろう。

×

海のむこうになにがある
島のむこうになにがある
父のしらない國がある
母のしらない國がある。

×

舟がでてゆく春の海
夢がよぶよぶ青い海。



かじ屋のフイゴ

小出正吾
いな保　田次

かじ屋の仕事場で、鐵がコークスにむかつていいました。

「コークス君はいかにも重そうに見えるが、じつさいは輕石のように輕いそうだな。」

するとコークスが答えました。

「でも、ぼくだつてフイゴ君のようにおなかがからん洞じやないぜ。フイゴ君のおなかときたら、まつたくからつぽで、空氣ばかりなんだからな。」

「うわつ、はつ、はつ……」

と、鐵はそれを聞いて大聲で笑いました。

「クス、クス、クス……」

と、コークスも笑い出しました。

鐵はじまんの通り、たしかに重いものでした。石炭がむし焼きにされて出來たコークスなどとは、くらべ物になりませんでした。しかし輕石のようなコークスでも、がらん洞の木の箱のフイゴのなかみに

くらべれば、どんなに重いかわかりません。それでコークスはフイゴをながめながら、鐵といつしよになつて、じぶんも笑つていたのでした。

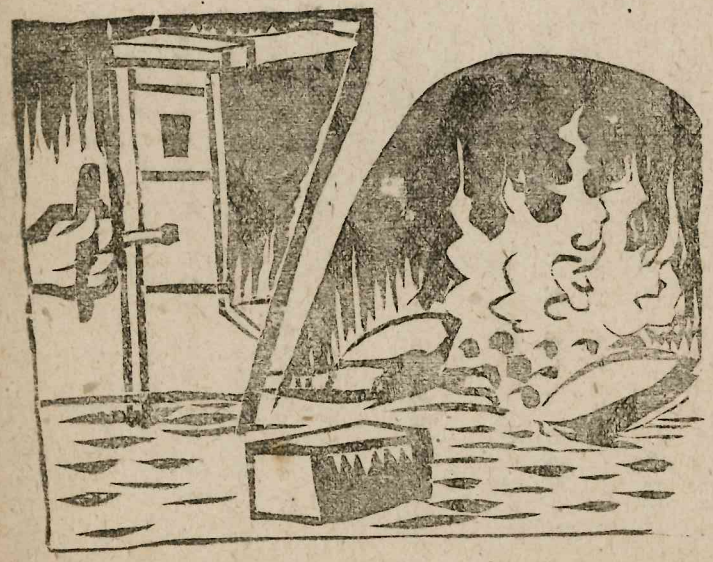
けれども、木の箱のフイゴはなんともいわずに仕事場のすみにすわつていました。なかみがからん洞だといつて笑われたとて仕方がない話で、もともとおなかのなかがからつぽだからこそ、フイゴの役目がはたせるというものです。

「笑うなら笑うがいいさ。」

こう思つて、フイゴもにこにこしていました。

ところが、やがてかじ屋さんの親方と小僧さんとがやつてきました。

かじ屋の親方は、その前へすわりました。小僧さんは、コークスを一ぱいろのなかへ山もりにしました。そして、鐵のかたまりをそのまんなかへ入れました。



親方はフイゴのとつてをにぎつて、しずかに動かしはじめました。すると、フイゴはそのたびに空氣をすつては、はき、すつては、はき

プウツ　プウツ　プウツ……と、火をおこしはじめました。

ろの火はカツカとおきはじめました。そして、今までつめたい輕石のようだつたコークスが、まつかになつてもえ立ちました。コークスのねつはどんどん高くなつて行きました。が、かじ屋さんは、まだまだフイゴをあおりつずけました。

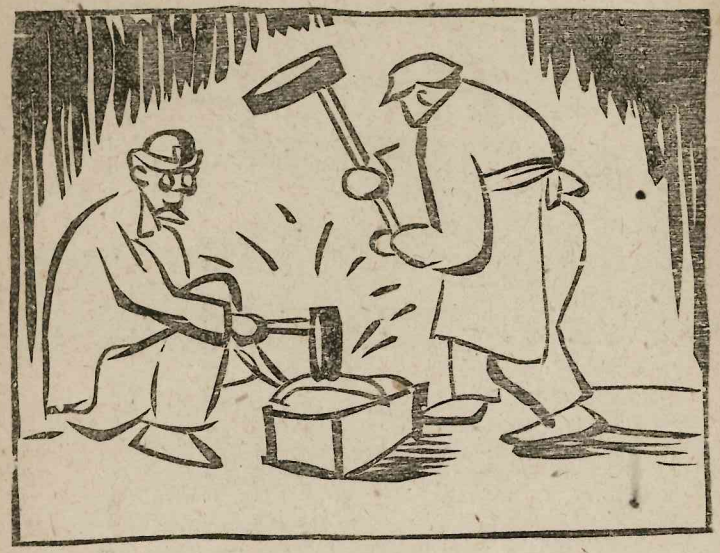
なかみのからつぽのフイゴは、空氣をすつては、はき、すつては、はき、コークスにプウプウ吹きつけました。おかげで、まつかなコークスからは、青いほのおがポツポともえあがりました。するとコークスのなかへ入れられていたまつ黒な鐵のかたまりもすきとおるようなまつかなかたまりになりはじめました重い鐵が、すつかりねつして、やわらかくなつてきたのです。

「よし……」

と、かじ屋さんの親方がいいました。そしてまつかな鐵のかたまりをカナハシではさんで、カナジキの上にのせ、右手ににぎつた小さなカナズチで、カチンとたたきました。それにあわせて、大きなカナズチを兩手でふりあげた小僧さんが、トンと一打ふりおろしました。

トン、カチ、トン、カチ……と、かじ屋さんの仕事がはしまりました。

鐵のかたまりは、一打ちごとに、だんだんひらべつたくのばされて行きました。そして、やがてまた黒くなり、かたくなり出すと、もう一どコークスのなかへ入れられました。が、その時、コークスは、いつのまにか白くなりかけていたのです。



そこで、フイゴがまた、

プウツ！プウツ！

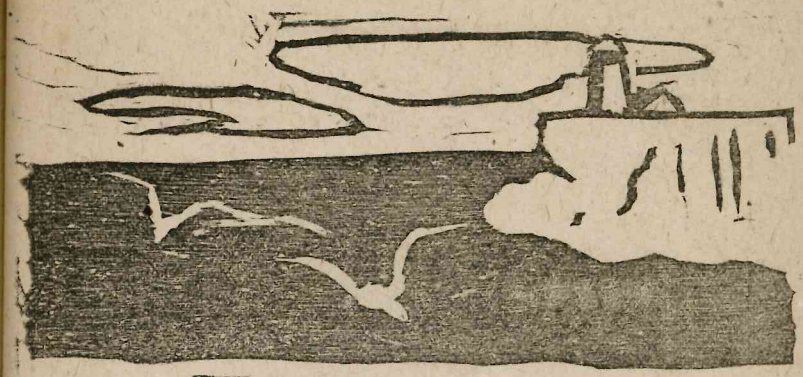
と、いきを吹きつけ、ろのコークスと鐵とをまつかにもえ立たせてやりました。

こういうことを、いくどもいくどもくりかえしているうちに、とうとう鐵のかたまりは三日月がたの見事な鎌になつて、かじ屋さんの手ににぎられ、と石でとがれて、するどい光をはなつようになりました。

りつぱにもえつくして役目をはたしたコークスは輕いもえからになつて、そとへ運び出されて行きました。

が、おなかのがらん洞のフイゴは次の仕事のはじまるのを待つて、あいかわらず仕事場のすみにじつとひかえているのでした。

なぜといつて、フイゴのからだはからつぽでしたから、空氣さえあれば、いつまでも、はたらくことができたのです。



早春

初六　池田　道幸

せつぶんがすぎたから
もう春さ
子供がうたつて
とおつたよ

それをきいてか
梅の木が
小さなつぼみを
ひらいたのさ

風はまだ〳〵さむいけど
雪も　ちよつぴり
のこつているが
もう春なのさ

（榎井校）

こま

初四　大年　信夫

手にこまのせて走つてた
犬が一匹ついて來た
おつかいのかえりみち
橋に夕日がてつていた

手にこまのせて走つてた
夕げのにおいがはなに來た
ちよつぴりさみしく
なつて來た
チョコ〳〵ぼくについて來た
犬はどこかへ消えていた

（琴平校）

日なたぼつこ

初五　久保　孝子

えんがわで
日なたぼつこで
本よむと
黑い文字が
あかくなつたり
黃色くなつたり

（大野原校）

小牛

高二　秋山　節子

うちのかわいい小牛さん
やつと二つのこの冬に
人に買われて行きました
この寒空に唯ひとり
親にわかれて行きました
今夜はどこでねてるやら

（白方校）

雨ふり

初三　川田　洋一

音もなく、しずかにふつて來る
細いこまかな雨
空はしだいに低く暗く
雨だれの音がだんだん高く
つよく早くなる
けむりのようにこくなつて
雨が横にとぶ
つよく弱く、ぼくは聲を出
して合唱しながら
かえつて行つた

（城西校）

水仙

初六　田中みそぎ

裏庭に出てみると
私のそだてた大事な水仙が
誰かにぬすまれていた
むしりとられた葉の上に
霜がきらきら
かがやいていた

（勝間校）

もちくさ

初四　宮崎　幸子

まつくろにやかれた
しば原に
やつと出た
もち草の葉
銀色に

（坂出東部校）

元氣で草をたべている
早く赤ちやんうんどくれ

（三本松校）

麥の手入

高一　石井　正光

夕日は西の空にかたむいた
ひろいたんぼに
誰も彼もが一生けんめいだ
日のくれぬ間に
麥の手入を終えねばと、
腰をのばさず一心に、
人影が長く土の上で働いて
いる
細道で子守さんが、それを
じつとみている

（豐田校）

海

初四　織田　訓好

いつきてみても青い海
いつきてみてもちめたいな
しぶきがあたつて
ちめたいな

（城西校）

妹

初三　曾根　康子

かわいいお手手が
おもちのよう
ぷつとはりさけて
いたそうな

（詫間校）

私の兎

初四　河野　玲子

白いおべべの小兎さん
何がそんなにうれしいの
赤いお目々でとびまわる
早く大きくなつとくれ
まるまるこえた小兎さん
ちらちら雪がふるときも

鳥

初四　長谷川昌央

冬空を
あちこちと二三羽
わかれてとんでいく
北の方へ　西の方へ
くろい鳥がとんでいく

（榎井校）

にんじん

初三　白川　順一

池の水は
にごつている
その上に
にんじんの葉が
うかんでいた

（大野原校）

山茶花

初四　田井富士子

きれいに咲いた
山茶花が
足ながばちに
つつかれて
みるまにちらちら
ちつてゆく

大きく咲いた
山茶花が
しぐれにふられて
ちらちらと
ちようのように
とんでゆく

（常磐校）

秋

初四　松本　浩子

つめたい風がカサカサと
おち葉をまわす長春で
去年今頃私は
ハンカチ賣りをしてました
ピアチルブレー
スカシーボー（ありがとう）
いつかおぼえたロシア語で
毎日立つた大同街
つれてゆかれた父さまが
かえつて來たのも秋でした

（城北校）

汽車

初四　山下富士夫

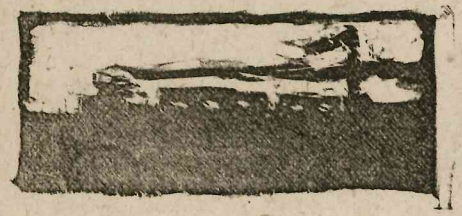
がつたんこ
きしやが走るよ
ふみきりだ
ぴいと鳴つたよ
ぽうと鳴つたよ
えきへきた
人が降りたよ
五六人
ぽうとなつたよ
動きだしたよ

（二番町校）

汽車

初四　中浦美恵子

汽車が煙をたてて
走つて行きました



ぐん〳〵走つて行きます
あ、
もう見えなくなりました

（川奥校）

汽車

初三　林　幹子

もしもし
長い汽車さんよ
南のとおいお國から
わたしの待つてる
父うさんを
つれて來てね
汽車さんよ

（仁尾校）

雨の日

初五　吉馴　宮子

しんとしている朝
ただ雨の音ばかり
ぽつ　ぽつ　と
——やがて——
かさ　かさ　かさ　かさ
かさで一ぱいだ

（法勳寺校）

寒い日

初四　田口　洋子

つめたいさむい風が吹く
はたけの大根さむかろう
えんどの豆もつめたかろ
私はそつとわらくずを
ふとんがわりに
かけてやつた

（二番町校）

冬ごもり

初五　宮井多美子

つくしの坊やの冬ごもり
長い〳〵冬ごもり
南の風が吹いてきて
たんぽのあぜをそつとなで
ぽか〳〵日のてる春までは
靜かにぐつすり眠りましよう
早く春こい、春こいと
小さなつくしの
冬ごもり

（城北校）

夕ぐれ

初三　三宅　和子

夕ぐれ道を
おかあさまと
お手手をひいて
あるいてた
白いつめたい
かあさんの手
赤い小さな
わたしの手
しつかりにぎつて
うたいつつ
夕ぐれ道を
あるいてた

（城西校）

たこあげ

初二　山地　廣子

ねえちやんが、作つた繪だこ
弟が今日も元氣でとばします
さむいかぜがふいてても
糸まきもつて走ります
繪だこはぐんぐん上ります
ときときフラリと首ふつて
さかさにおちてしまいます

（白方校）

水仙

高一　原　綾子

教室の花瓶に咲いた水仙が
柳の枝から
につこりのぞいている
柳の小枝に咲いてるようだ
さむくても
につこり咲いている

（辻　校）

かじやさん

初三　山地　節子

かじやのおぢさん
こんにちわ
はい、こんにちわ
とんてんかん
やくそくしていた小刀だ
ようひかるだろ
手など切つては
いけないよ
とんてんかん
手など切りません
さようなら
はいさようなら
とんてんかん

（豊原校）

梅

初三　松野　正剛

焼けあとに
たつた
私の小さなおうち
梅の花が咲きはじめた
外には
強い風がふいている

（二番町校）

つばめ

初四　中山　淳子

つばめよつばめよ
よくきたね
去年のおうちを
わすれずに
すいすいつばめよ
よくきたね

（城坤校）

バット

初六　渡鍋　恒

せがんで買つてもらつた
バット
どうしたんだろう
バットがない
おもてで誰かの聲
のぞいてみると
弟がふりまわしていた。

（多度津校）

人形

初五　平尾絹子

いつも人形はだまつてる
まどにもたれてお人形は
三日月さまをみていても
やつぱり
だまつて居りました
いつも人形はだまつてる
いすにすわつてお人形は
たのしいえ本を見ていても
やつぱり
だまつて居りました

（勝間校）

こけい

初五　木村　浩子

小さい、まるい
かいちゆうとけい
五年前——
ここのおうちの父さんと
支那の保定へ旅をして
おととしの十二月
内地へかえつて來たのです
なんにもない　りさいの
このうちで
小さなとけい
だいじなものの一つです
チクタク、チクタク……

（亀阜校）

弟の熱

初六　森　美智子

時計は九時をうつた
家の人はつかれて皆ねどこについた
雨がふつていたのもやんで
しずくがぽたり！
てつびんの湯が
ちんちんわいている
あおむけになつて靜かにね
むつている弟
どうかせきが出ないように
そうつと
私の額をあててみた
三十七度位だろう

（大濱校）

みかん

初三　田井豊子

みかんのお里はどこかしら
遠いお山のおくかしら
ひろい海べのはまかしら

みかんのお花はいつ咲くの
みかんのお花はどんな花
咲いたお山がみたいなー

（常磐校）

朝

初六　宮井道子

雪かと思う大霜の今
朝も父さま早くから
たんぼへ出かけて行きました
朝げのしたくが出來たので
白いてぬぐいで父さまに
約束のあいずしましたら
ぽうしをふつて父さまが
元氣にほほをあかくして
にこにこ笑つてかえります

（土器校）

紙ばさみ

初四　松田秀信

みちばたに
紙ばさみがおちている
雨がかかつて
びしょ〳〵だ
黒い靴のあとがある
誰にふまれたんだろう
墨の名前がにじんでいる

（坂出中央校）

猫

初五　山下　静子

ひよいと石を投げてみた
かわらが
からんと音たてた
ねこがすつくり
せのびした

ねこをだいて
背戸に出た
梅の匂いが
ふつとする
ねこは目をぼそくして
じつとみている

（坂本校）

ねこ

初五　合田　幸子

かあさんが、するめを買つて來ると、うちの子ねこがこたつの中からとんできてニヤンニヤンとなきました

火ばちのするめ、ひつかいたり、私の手や口に、とびつくので、ちやい、ちやいとのきました。

（常磐校）

うちのこねこ

初三　岡田ミサヲ

うちのこねこは
かわいい子ねこ
おこたの上でぼそ目して
外の雪ふりみているの

うちのこねこは
かわいい子ねこ
「こどものじかん」が
おわつたら
いつも
わたしとねているの

（大野原校）

はごいた

初四　山地　節子

かちん　かちん
ついている
むちゆうになつて
ついている
ぽちんと川へ
おちこんだ

（川西校）

洗たくもの

初五　大場　良子

私の洗たくものがかわいた
すすつと　ゆすつたら
ズロースはやつこだこみたい

ふろしきは　はたのよう
みんなしやちこばつて
一列に竿をすべつてきた
兩手でかかえたら
日のにおいが
むんむん
あたゝかかつた

（亀阜校）

すいせん

初三　牧野伊久子

けさお庭をはいてたら
黄色いすいせんが
しもの間から
頭をあげていた

にわとりが二羽
となりでくくと
えをあさつているが
たべはしないか、と
しんぱいになつた

（花園校）

おぢさん

初六　齊田　節子

フイリツピンの引揚はおわつた
だのにあのおぢさんは
まだかえらない
あさみどりのあの空え
呼びかけてみたいような——
胸がこみ上げて來る

（城北校）

朝

初三　豊島　通男

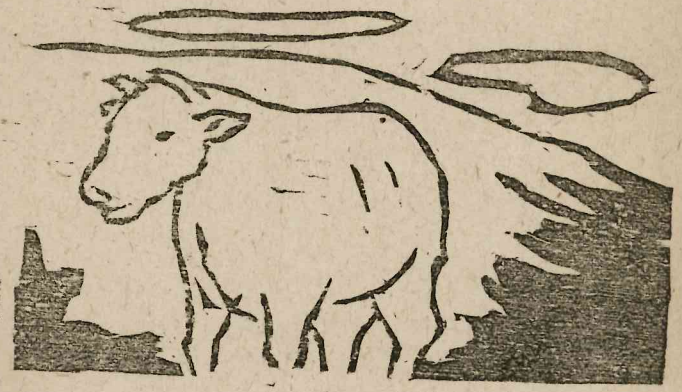
○

牛屋から
牛の鳴くこえがした
口から
白いいきがでた

○

たんぼのあぜに
からすがとまつている
くちばしに
何かつけて
とまつている

（上高瀬校）



母

高一　中脇　艶子

火のけもなくなつた
火鉢のそばで
よなべするお母さん
わたしは　そうつと
のぞいてみた
風が、戸をならしている
わたしはもう一ど
ふとんの中から
お母さんをのぞいてみた

（大濱校）

ねずみ

初一　横田　良平

コトコトコト音がする
ぼくがお目目をさましたら
たんすの上でチョロチョロと
小さなねずみが
大きなおもちをもつてつた

（松島校）

からす

初四　高尾　翠

なつぱを取りに
ゆく道で
からすが二羽
ないていた
なんていつてるんだろう

（川奥校）

春

初二　合江　桂子

たんぼの麥は
春が來るのを待つている
春が來ればわたしは三年生
麥もわたしも
春が來るのを待つている

（城北校）

春

初四　粂橋　利枝

春はいつ來る　いつ來るの
かわいい私の妹の
お手手のしもやけなおつたら
春はそろそろやつて來る
ぽかりぽかりとやつて來る
春はいつ來る　いつ來るの
かぜひき坊やのおとうとの
こんこんせきがやんだなら
春はそろそろやつて來る
ぽかりぽかりとやつて來る

（城北校）

つくし

初四　宮武千惠子

川土手に
つくしの坊やが
あたまを出した
ひよつとぬいてみた
かわいい
つくしの坊や

（一の谷校）

弟の手

初三　渡邊　善弘

弟の手　つめたい手
かねよりつめたい
だつこしてやると
わからんことばを
よくはなす

（神野校）

妹

初四　三好　育子

わたしの妹信子ちやん
へんな手つきでおどります
いつもおんなじおどります
私の妹信子ちやん
わるいことしてしらん顔
かあさんおこつて
めめすると
いつしよになつて
めめします

（坂出中央校）

弟

初四　佐久間紀子

「おとしいくつ」
ときいたなら
かわいいもみぢの手を出して
「四つ」
とゆびでおしえます

（土器校）

弟

初四　岡崎美枝子

ようちえんのそばを通ると
すぐ思い出す
ただいま、とかえつてた弟
今はもういない
運動會のときだつて
どんどん
たいこをならしていたのに

（坂出林田校）

（美枝子さんは昨年末の地震でお母さんと弟さんをなくされたそうです）

かげ

初四　渡橋幸次郎

ふろのかえりに
えきのうらを通つたら
ぼくの姿が
五つのかげを
作つていた

（坂出東部校）

かげ

初二　橋本　敬二

ぼくが
道を通つていた
ふとよこをみると
ぼくのかげがうつつていた
ぼくのかげを
だれかがふんだ

（觀音寺校）

かげ

初五　塩田　邦江

てつぽうかついだ父うさんの
黒いかげがゆれている
あとへつくのは「シロ」だけが
足の音もさむそうに
前に、後に、ついてゆく

（龍川校）

影ぼうし

初四　上里瑠美子

うららかな太陽
教室の空ガラスにうつつた
大きなかげぼうし
おや、と思つてのぞいてみたら
先生のおひげが
につこりなさつた

（栗林校）

お箸

初五　中野千恵子

いつでも御ちそう
つまむけど
一つもたべたことがない
お箸はごちそう
たべたかろ

（城坤校）

麥

初三　古市　修三

北かぜがふく
ひろいたんぼに
麥が大ぜい
さむそうに
すわつている

（神野校）

夜

初四　櫻井ミチ子

みんなで
母あちやんかこいこみ
火ばちのそばで話する
母あちやんの
昔の思い出
父うちやんのいたころの
昔の話
今夜もききたいな

（大濱校）

かたたたき

初三　高木　奬

おばあさんの
かたたたき
ばあさん「もうよい」
といいました
ぼくは一つ
どんとたたきました

（法勳寺校）

オフロ

初三　間島　清博

ドンドンパチパチ
火がもえる
早くわけわけ　わいてくれ
今日は　はつぶろ
うれしいな
ぽかぽかぽかと
あたゝかい
お手手のゆびが
かせてきた
たこのようだと
母さんが
せなを流して
笑つてる

（二番町校）

山みち

初三　前田　久代

さみしい山のみち、私とお
母あさんと歩いていた
どこからか、からから、かさ
かさと音がする。
とおくでも音がする。
お母あさんにたずねると、
「木の葉が、枯れて
　おちる音だよ」
といいました。

（坂出東部校）

やぎ

初六　横關　敏子

めえめえ小山羊
空に向つてないている
お目目にお空がうつつてる
めえめえ小山羊
空に向つてないている
おひげゆらゆらゆれている

（神野校）

子きじ

初六　椎田　朝江

お山の子きじも寒かろう
外は初雪　ちらちらと
風に吹かれて降つている
ケン〳〵子きじが今ないた
外は初雪ちらちらと
聲にまじつて降つてくる

（岡田校）

鏡

初二　藤原　範子

かがみに顔がうつつてる
私の顔がうつつてる
かがみにたんすうつつてる
私のねえさん鏡の前で
おしろいつけてかみといて
きれいにおしたく
しています
私もまねしてといてみた
ねえさん笑つて
みています

（善通寺東部校）

ゆめ

初六　小野　玉江

ゆうべ　ゆうべ
ゆめをみた
きれいな　きれいな
ゆめをみた
ちよこんと　かわいい
赤ちやんの

（象郷校）

ゆめ

初四　細谷　敬子

やさしい聲で
父うさんが
元氣でいるか
とおつしやつた
うれしいと思つたら
さびしいゆめでした

（坂出林田校）

かいつぶれ

初四　宮武美代子

大きな池のまん中に
かいつぶれが、かたまつて
ゆれている
ポコツと一羽がもぐつた
又ポコツと
おや！
あそこへ出た
あゝ又あそこえ……
つぎつぎと……
高いつつみの枯草に
山羊がお池をみている

（豐田校）

日曜日

初四　大旗　照子

妹つれて　さんぽみち
きれいな花が　さいていた

妹つれて買物へ
赤いリボンを買つてきた

妹つれて　父うさまと
え本を買いに　行きましよう

（城西校）

一年生

初四　水野マスミ

學校がえりの一年生
二人で車のあとおしを
しながら二人で笑つてる
ときどき一人がぶら下り
又また一人がぶら下る
ほんとにかわいい一年生

（勝間校）

やぶこうじ

初三　木村早知子

まつかな　まつかな
やぶこうじ
みどりの葉つぱの間から
まあるい　小さな
やぶこうじ
ゆめにみたような花のよう

（岡田校）

枯葉

初四　二保　保

風が吹く
木の葉　枯葉が
から〳〵うたい出すと
すずめが二三羽
にげ出した

（豊田校）

朝

初六　永峰　峻

雪の朝だ
土間に雪をたくさんつけた
下駄がぬいである
みそ汁のうまげな

湯氣がたつている

（琴平校）

いたずら

初四　井上　石子

晩のごはんをたべてたら
いたずら電燈消えました
急いでローソクつけますと
いたずら電燈つきました

ローソク消してたべだすと
いたずら電燈消えました
ほんとに　ほんとに
いじわるだ
いたずら電燈いじわるだ

（豊濱校）

こんごばやし

初五　佐野　明子

霜ばしらたつ
小川のほとり
とんどばやし
あちら　こちらに
見える
白いけむり

（神野校）

せんすい

初四　橋本　弘志

せんすいに
氷がはつた
ふなも金魚も
さむからう
氷の下で

（大濱校）

たこ

初五　山本　英子

かんと晴れた
冬空に
高く上つてまいおちる
やつこだこ

（坂出中央校）

海

初三　吉田佐和子

さらさら流れる海のしお
ぐんぐん走る船の音
ぶくぶくうかんだ船のあわ
ゆらゆら海がいきしてる

（花園校

波

初二　登　健

波さん　波さん
どうしたの
いつも走つて　どうしたの
だいじなものでも流したの
波はいつでも
走つてる

（觀音寺校）

かへり道

初五　黒谷　定代

歌のけいこに夕ぐれて
さよなら、さよなら、
またあした
友と別れてくちずさむ
名も知らぬ遠き島より
流れよるやしの實一つ！
村のバス
赤い灯つけて遠ざかる
その灯のはてに
里の夕げの灯が見える

（大濱校）

かもめ

初五　佐藤　淑子

水をくんでいると
かもめがとんで來て
海にうかんだので
石を投げた
もぐつたと思うと
魚をくわえて
青い空へ
とんでいつた

（粟島校）

新芽

初五　石井　智子

かわいいお芽々が
ふくらんで
春さん早く來ておくれ
あの木も
この木もよんでいる
春さん見ていて下さいね
わたしの咲く香きましたわ
あつちも
こつちも聲かけて
子どもの歌う聲がする

（宇多津校）

波

初四　山本　壽志

ぼくが海を歩いていたら
波がぱちやぱちや
うたつていた
ぼくが海を歩いていたら
波がちやぶちやぶ
よつてきた

（多度津校）

にらめつこ

初五　大石　良子

一二三で
にらめつこ
わろたらだめよ
わろたらしつぺ
うんとこどつこいしよ
一二三で
にらめつこ
十でとうとういもとがわろた
しつぺを一つ
うんとこどつこい
私もまけた

（城北校）

兄さん

初四　草薙　年代

私の兄さん
はちの巣つついて
はちにさされた
ぶくぶくふくれた
あのおかお
私の兄さん
あわてもの
おやつをのどにひつかけて
お目目をしろくろ
あのおかお

（坂本校）

風

初三　安藤　勝利

かぜが吹くと
木の葉がゆれる
いやだ〳〵と
ゆれるのに
かぜは笑つて
吹いている

（詫間校）

北風

初三　亀井　具子

外へ出た
ひやつと風がほほなでた
でんせんに風が吹く
はしらも　でんせんも
うなつてるよ

（土器校）

風

初三　原　正一

風が
びゆつと吹いて來る
松の木が
音をたててゆれている

風が
びゆつとふいて來る
池の水わが
だんだん
ひろくなつては
消えてゆく

（辻　校）

風のうた

初三　鷲岡　潤子

風さんとてもいたづらね
お庭のはつぱを
ふきちらし
おうちのがらすを
かた　ことと
たたいて私をこわがらす

（川西校）

木枯の晩

高一　乃田冨美子

木枯の晩
とんとん戸をたたく音
あらゝたれか知ら
そうつとあけてみると
滿洲のおぢさんが
立つていた

（坂出東部校）

風

初三　西野　榮城

風さん　風さん
どこから來るの
風はあるけど

見えないな

（大野原校）

川の流れ

初六　織田　黎明

朝から晩まで
たゆみなく
いつも同じ音たてて
下へ下へと——ひろい海まで
今夜はどこを通るやら

（法勳寺校）

夜

初六　橋田　忠明

弟が
母を困らせている
おもちを焼きはじめると
すぐニコ〳〵顔になる
赤風船のように
プーとふくれる
窓がらすが
かた〳〵ゆれている

（辻　校）

子牛

初三　白川　忠良

ぺろぺろ牛の子
なぜねぶる
手のひらなんにも
ついてない
ぺろぺろ牛の子
なぜねぶる

（豊田校）

夜みち

初六　植田　弘枝

夜のおつかい
さみしいな
むこうにみえるは
おばけかな
私とねえさんびつくりし
そばまで行くと
おじぞうさん

（坂本校）

雪フリ

初一　香川タダシ

雪ガフツテクルノヲ
マドカラ見テイタラ

ボクモキヨウシツモ
グングン
お空ヘノボツテイクヨウダ

（法勳寺校）

雪の夜

初四　村井　久子

雪のふる夜は
しずかな夜だ
まわたの小雪ふんわりと
電燈の光が
ぱつとてる

（榎井校）

雪

初二　香川　健二

雪がつもつた
山の木がまつ白になつた
山の木に花がさいたよう
むこうの山は
みえなくなつた

（榎井校）

雪

初三　大矢根舜三

雪がふるふる　雪がふる
お山のふもとにつみました
きらきらきらと光る雪
大山小山にもります
野にも山にも雪がふる
月がさしてる光つてる

（仁尾校）

雪

初四　岩崎　敬子

だれかが早く歩いたか
大きな足あと
この初雪を一ばんに
私があるこうと思つたに
あゝだめだつた

（琴平校）

雪

初六　曾根　智美

學校からのかえり道
のこつた雪を手にとつて
川へ投げたらころころと
つぶれもしないで

まわつてゆく

（詫間校）

雪だるま

初二　大喜多達夫

雪、雪、
ふれ、ふれ
ぼくたちは
みんなそろつて雪だるま
どつかりすわつて
ねばつてる

（辻　校）

こすずめが
ちよろりとおやねへ
とんでつた
ちちとないては
とおいお山へ
とんでつた

（辻　校）

雪

初四　原　親子

雪のお庭に

雪

初四　眞鍋　哲男

雪の降る夜は
靜かな明るい夜だ
みんなよろこぶ
大雪　小雪
遠く近くに雪がふる
とおい所はねずみ色
近い所はぎん色だ

野山をうずめる
大雪　小雪
ちらちら　ちらと
雪がふる

（紀伊校）

ゆき

初六　白川　襄子

そうじ水
くみに行つたら
ボタ雪がそうつとくびすじ
しのびこむ
「あつ」
とけてしまつた

（一の谷校）

ゆき

初六　大久保典子

とみちゃんの
赤いオーバーに白い雪
だん　だんふえる
花もよう

（一の谷校）

ゆき

初六　高橋　稔

川の中おちてはとけて又おちる
とけても　とけても
またおちる
あとから　あとから
おちてくる

（一の谷校）

ゆき

初四　大川佐代子

さらさらさらと
ぼたん雪
おにごつこしながら
おりてきて
おやねにきては
一やすみ

（善通寺東部校）

ゆきの日

初四　中野　重子

雪降りに
かさをもつて來た
おかあさん

じつと見送つてたら
ふぶきの中に
消えて行つた

（一の谷校）

ゆき

初四　尾崎　惇子

「雪だ」と
弟がいつたので
急いで窓をあけると
ちらちらとぼたん雪
みんなさそつて
おりて來る

（城坤校）

ゆき

初三　眞鍋喜代子

雪がちらちらふつて來る
私たちはよろこんで
みんなおもてへとびでよう
はんかちひろげて
まつてます

（城北校）

小ゆきの踊子

初五　田中　收

小雪ちらちら
白い小さな踊子さん
空からおどつて
降りて來る
葉つぱの上や
屋根の上
白い小さな踊子さん

ねむつているね

（城北校）

ほこり

初四　宮本　哲

窓をとうした
光の中に
もよもよしたほこりが
おにごつこのように
上つたり下つたり
たいへんのさわぎだ

（坂出中央校）

こすずめ

初三　石川　恭子

こすずめさん

どこへゆくの
小さなおはねをちちちらと
かあさんすずめを
さがしにゆくの
かあさんすずめが
かえつてきたら
あたゝかいすの中で
たくさん　おちちを
のむんでしよう

（大野原校）

てまり

初三　豊岡佐智子

てんてんてんまり・
てんてまり
いつもついてたあのまりは
いつの間にやらどこいつた
だいじな私のあのまりは
どこでおねんねしてるやら

（城北校）

夜

初五　岩瀬　健一

夕日が西に
東の山からお月さん
そつとまるい顔出せば
みんなそろつて「こんばんわ」
空にはきんきら銀の星

（土器校）

大根洗い

初五　大島　幸子

母によばれて
大根洗い
手一がたまらなく冷たい
きれいになつた大根
流れる水に
白々とうつつている

（亀阜校）

氷

初三　深井　和子

朝學校へくる途中、小川に
氷がはつている、私は石を
なげた「からん」と音だけ
して石が走る。こんどは力
一ぱい投げた「からん」と
音がしただけで、氷はびく
ともしなかつた

（坂出東部校）

きようしつの花

初三　秋田　正子

赤と白のちゆうりつぷ
ならんでちゆりつぷかわいいね
白いちゆりつぷせが高い
赤いちゆりつぷせがひくい
又あしたあいましよう
ならんでちゆりつぷさようなら

（城北校）

雀さん

初六　田所　淳子

ひろいお空をとんでいる
かわいい小さな雀さん
あなたはおうちがありますか
私のうちはやけたのよ
ひろいお空をとんでいる
かわいい小さな雀さん
あなたは友達ありますか
私はたくさんありますよ

（川西校）

親子雀

初五　島田サクエ

元日の朝早く
朝つゆかゝつた電線に
親子雀はおそろいで
朝のお歌をうたつてた
チツチクチツチクチツチクチ
今日は正月うれしいな
雀の親子もたのしいな
楽しいおひるのごはん時
歌のおけいこしています
チツチクチツチクチツチクチ

（大見校）

◇

初二　小野　正徳

いどの中を
のぞいたら

ぼくのかおが
うつつていた
水が
ゆれていた

（上高瀬校）

雨あがり

初三　大西　寛

窓ごしに
外をみると
ささの葉がゆれている
空にはまだ
ねずみ色の雲が
たくさんある

（柞田校）

ジープ

初三　福田　時子

走る　走る
ジープが走る
道の子供ら
ハロー　ハロー

走る　走る
ジープが走る
のつてるへいたい
グツバイ　グツバイ

（二番町校）

すずめ

初三　山田　文江

すずめすずめ
ちゆんちゆん〳〵

葉つぱのかげから
かお出して
どうしてわたしを
みているの

（土器校）

とたん

初三　中野　輝子

朝から雨がふり出して
とたん、とたんと音させる
雨がとたんを
よんでいる

（豊原校）

あみ

初五　阿守　忠明

くらくなつてから
あみをひきにいつた
あみに
うろこが一ぱいついて
星の光で
きらぎら光つている

（栗島校）

雀

初六　篠原　良子

雀、小雀、なき雀
お前の歌で日がくれる
お前の歌で夜があける
雀、小雀、なき雀
風の吹く日もちつちつち
雪のふる日もちつちつち
雀、小雀、なき雀
お前の歌で日がくれる
お前の歌で夜があける

（多度津校）

氷

初二　横田　正則

風がたくさん吹いて
氷がはつてさむかつた
友だちさそつて行きました
友だちが
「あそこへ行つてみい」
といつたから
ぼくは急いで行きました
すると
すつてん　ころびました

（龍川校）

赤たび

初四　宮崎　吉生

おじいさんは
たんじよう日に
赤たびもらつてうれしそう
六一いわいをするのだと
いつも
赤たびみつめてる

（観音寺校）

◆

初四　合田　和恵

かれ木を積んだ
車やさん
どこのお人か

しらないが
うちのちいさんに
よくにてる

（大野原校）

はねつるべ

初四　藤原　碩正

ぎーつこく
はねつるべ
お庭の梅の花ざかり
かわいいとりがとんでくる
つるべはぎいつこ
はねつるべ

（法勳寺校）

おもち

初二　あべあやみ

おもちをやいたら
ぽうず山ができた
おはしでつついたら
ぽうず山きえた

（域坤校）

ここの間

初四　三井　弘一

とこの間靜かだ
とけいの音かすかに
遠くから
ぴいぴいと
すずめの聲
とまつたりやんだり

（女師附屬校）

すきま風

初五　中道　文子

おうちのかべはすきだらけ
疎開でたてたうちだもの
北風、西風
おうちの冬は風ばかり
ふとんの中まで寒くなる

（坂出東部校）

落ち葉

初六　花岡　宏子

ちらほら落葉がちりました
植木をみながら父さんは
「そろそろ霜よけ作りましよ」
ちらほら落葉がちりました
母さんみながらひとりごと
「こどものセーターあみましよ」

ちらほら落葉がちりました
ねえやはためいきついてます
「はいてもはいてもちる落葉」

（男師附屬）

どんぐり

初三　砂川　弘

どんぐり
どこからころげて來た
お山の上からころげて來た
どこまでころげて行くかな
お山をこえて池へ行く
どんぐりお舟にのつてゆく

（三本松校）

お顔

初六　古市マサエ

みんなのお顔うれしそう
赤いほつぺたまるい目目
なにがそんなにうれしいの
赤いお顔に
まるい目目

（岡田校）

冬の夜

初四　三宅　桂子

冬のよるは
さみしいな
空には
星があるけれど
冬のよるは
さみしいな
私があるくとどこかでも
人の足音
きこえます

（仁尾校）

夜

初二　陶山　征男

しずかな夜だ
ばあちやんこくりと
ねむつてた
おこたのそばで
子ねこさん
やはりこくりと
ねむつてた
外はさらさら雪の音

（詫間校）

子ねこ

初三　丸岡　康子

家の子猫は
かわいい子猫
首にすずつけ
ちんちろりん
自分のすずに耳立つて
とんぼがえりはおもしろい

（善通寺東部校）

一の谷校初六　石川和子

木の枝につもつた雪が重くなり
しだれてばさりと落ちました

男師附屬高二　西川弘子

風呂がえり母と二人で麥のみち
月の光をあびてかえりぬ

城西校初五　西村朗

朝早く鶏小屋の戸をあけて
われ先に出る鳥をかぞえる

一の谷校初六　茨城弘子

お友達雪を手にとりしらん顔
人の頭にひよいとのせける

栗林校初五　西岡祥博

風の日に道に出會いしお婆さん
梅の小枝をしつかりと抱く

城北校初六　葛原信代

こみあえる町の風呂屋にひたりつつ
なつかしく思う城崎のこと

城北校初六　齋田節子

引揚げは終れりというに歸えり來ぬ
父を思いて祖母たのしまず

大濱校初四　大畑義晴

ゴム長をはいて濱邊を歩いたら
磯うつ波に靴の音する

城北校初五　宮井多美子

あくがれの服きておどりうれしさを
しのびて今日も一人ほゝえむ

城北校初六　河野純子

朝鮮のオンドルこいし冬の夜
つきたる炭の乏しきをみて

大濱校初五　黒谷定代

雨だれの一しずく毎に砂土は
深くくぼみて水たまりけり

大見校初五　瀧口由紀子

北風の吹く日に母と山にきて
おち葉かきつつ春を思えり

大濱校初六　今井靜穗

叱られて心さみしく濱に出て
沖の漁火うるみてみゆる

城北校初五　糸川惠美子

一人居のさびしきままによりそえる
火鉢の灰にへのへのもへの

大濱校初六　三宅安子

軒下に見知らぬ人をあやしみつ
急ぎかえりぬ雪の日のくれ

常磐校初六　大西ヒサエ

死ぬべきを生きてかえりぬ遠くより
みよ兄さまのよろこびの顔

豐田校初五　小野節子

道すがら眺むる遠き峯つづき
雪ののこれる伊豫の山山

大見校初五　眞鍋靖子

竹やぶにいつの間にやら咲き出でし
うすもも色の梅美しく

常磐校初六　高橋和子

針仕事手をやすませてたらちねの
母は弟の寢顔みている

大濱校高一　中谷八重子

夕暮の濱をよぎりて歸えりゆく
鳥の羽の大きかりけり

豐田校高一　二宮茂

便りかく窓邊にさきし梅の花
押し花にして春を知らさん

大濱校高一　山路美登里

明けきらぬ伊吹の島の眞向うに
かかりてあれる新月うすし

秀透冬果選

松島校初六　畠山龍子

寒肥す父は來る日を語りつゝ

農家の作物をつちかう苦心とよろこびが物語のように詠まれています。お手傳しているあなたにお父さまは、この小さい麥の生育について語りながらいそしまれる。なんという明るい情景でしょう。

大野原校初五　三宅久子

先生とみんなでつくる雪だるま

めづらしく雪がつむ校庭で今日は先生と一團になつて雪だるまをつくるたのしいひとゝきが「みんなでつくる」によつて彈んでいます。

二番丁初四　上田耕造

寒の月やしまの山を照してる

大きな屋根が海にひたつているような屋島、その肩のあたりを照らし出した寒月の夜の光景はすごくいきものゝようです。

豊田校高一　藤井武雄

大通寺境内うづめて枯櫻

大通寺という古い名もふさわしく、この境内を無數の枯櫻に配した冬景色の壯嚴さ、「境内うづめて」にそのこゝろがこめられています。

神野校初五　三原照代

早春の松山峰に日がかゝる

みづみづしい希望にみちた早春の日が名もある

松山峰にかゝると奏でゝ、この句は快よいリズムをおくつてくれます。

十河校初三　久保節子

はい色の空とわかれて雪の花

雪花がちりはじめたときの空模様を、繪のやうに巧みに描き出されたのは、「わかれて」というスッキリしたことばが効いています。

坂出東部校高一　高畑巖

落葉かき海のかなたの母想う

山にきて、海をへだてた氣持がこの句によく出ていて落葉かく頃のさみしい感情ととけ合つています。

仁尾校高二　小田サトノ

枯茅の中に水仙まだ小さく

つゝましい季節の花を枯茅の中に見て、ほゝえましいかんがいをこめて詠まれています。

佳作

常磐校　宇野文子

あさ寒に野中の井戸の氣を吐ける

豊田校初五　近藤伸子

みぞごとにたまるあられの寒そうに

琴平校初四　笠井信江

南天の一際目立つ庭の雪

大濱校初五　小黒紀久子

とび一羽かんと冴えたる空にあり

多度津校初五　福田久美子

冬の月ぢしんのあとのわれ瓦

十河校初三　久保節子

はれぎきてみんなにこにこはつまいり

川西校高一　辻村義男

桑の葉が風に追われて鬼ごつこ

琴平校初六　永峯峻

吾友と冬をきたうるボール投げ

飯野校初五　宮本節子

今日もまた寒いろう下にてまり音

城北校初六　川西チズ子

庭をまう枯葉の音や朝しづか

坂本校初五　宮井卓夫

霜のあさたきびかこんで友をまつ

白方校高二　秋山和子

教室の窓ににおえる梅の花

大野原校初六　石川瑞枝

椽先に水仙の花においけり

坂出東部校初五　矢野夏生

つゝましく寒水仙のかおりかな

廣島校初四　藤本美富

豊年のみこしにぎわう松の馬場

筆岡校高一　畦田進

軒下に雀まいこむ冬の風

與北校初五　上井絹子

おや豆がちよんと芽を出しそこゝに

城西校初四　小野知足

元日の丸亀城の日の出かな

二番丁初五　山内淳子

朝日さす霜のあしたの靜けさよ

城西校初六　藤田德子

星一つ枯木にひかる冬の空

坂出東部初五　岡田英雄

冬の草枯葉の中で日をまてり

飯野校初五　大西貞子

霜柱さくさくふんで學校へ

飯野校初五　藤井登美子

停電にあかるく照す月夜かな

城西校初六　森登美子

かちかちとよまわりさびし犬の聲

坂本校小林笑子

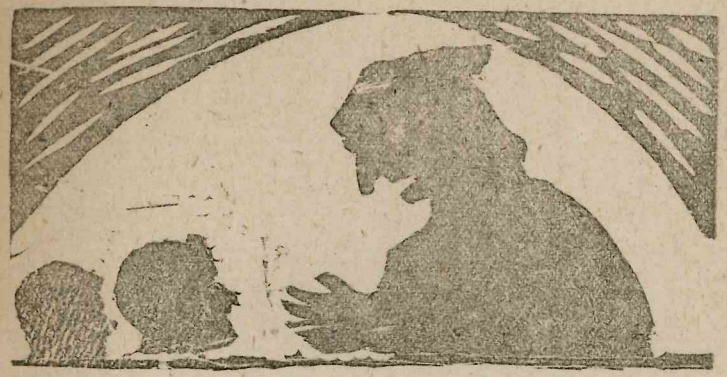
笑い聲もれる農家のよなべかな

多度津校初六　土岐守

山の雪あさ日をけうて輝けり

常磐校西川令子

寒月や母と二人のつかいみち



ハンセルとグレテル

作　グリム
譯　森三郎

（昔）々、大きな森林の近くに、ハンセルとグレテルという二人の子供を持つた大へんまずしいきこりが住んでいました。二人の母親はすでに世を去り、まま母の手にかかつていました。世間の例にもれず、このまゝ母は二人の子供を愛してはいませんでした。けいきがよいときでも、四人の家族が、まんぷく出來るだけの食物はありませんでしたもの、不けいきなときなどには殆んど、うえじにせんばかりになることもありました。

或冬のこと、その地方は大ききんでした。きこりの苦しみはなみたいていなものではありませんでした。彼の妻は、子供をみるにつけ、

子供さえなければ、こんなに困りはしないのに、四人が、うえる所を二人ならば、何んとか生きてもいけように」

などと考えるのでした。

（或）る晩、子供がねどこに入つたあとで、妻はこのことを夫に申しました。そして言葉をつづけて

「子供を明日森えつれて行き、自分らだけコツソリ歸えつてきましよう、寒さで二三日したら死にますよ」といいました。きこりは子供をかわいがつて居りましたので、そんなむごい別れかたは、したくなかつたのですが、妻があまりにも、かきくどくので、

「すきなように、おし」といつて二人共ねどこにつきました。ところが、たまたま二人の子供はまだ眼をさましていて、このただごとならぬ話をきいてしまいました。妹のグレテルはしくしくと泣きましたしかしハンセルは、

「氣にしないでね、私にまかせておゝき、早くおやすみ」とささやきました。それから、あたりが靜かになつたのをみとどけてハンセルは、月明りの表え出て、庭にある白い小石を拾つてポケツトに入れました。

翌朝早くまま母は二人を呼びおこして、

「今日は一日中森えまき取りに行くんだよ」と申しました。朝食をすませて彼らは出かけました。ハンセルは皆より一歩おくれてついていきました。そしてときどき道しるべに、白い小石をおとして行きました。

森の奥えつきますと、父母はそだを集めて大きなたき火をしました。子供一人一人に、パンを一きれづつあたえて

「これからずつと奥え丸太を切りに行つてくるから夕方つれに來る迄火のそばでよくおやすみ」と申しました。

ハンセルもクレテルも、その言葉の意味がよくわかつていましたが、別に何も言いませんでした。二人はパンを食べてねました。目がさめると夜になつていました。

今出たばかりの月のために、あたりは明るかつた寒いのとこわいのとで、かわいそうにグレテルは泣き出しましたが、ハンセルは

「グレテルよ、かまわないことよ、私が來るみちみちおとしてきた　小石を、たどつて行きさえすれば、まつすぐおうちえ歸れるのよ」と申しました。元氣な兄は、妹の手をとつて、いつしよに森を出かけました。

（さ）てきこりと妻は家えもどつてから、しばらく時間もたちましたが二人とも、氣持がよくありませんでした。めいめいが寒い森にポツネンと殘してきたかわいそうな子供のことを考えていたのです。すると、ちようどそのとき、戸口の所で戸をたたく音がして、

「お父さん、お母あさん、どうか戸をあけて下さい、とても寒いわ」という幼い聲がしました。父おやは、とび上つて彼らを入れてやりましたが、まま母は

「びつくりさせて、おゝちやくな子だね、あんたたちは、まよい子になつたと思つてた」と申しました。

（こ）のことがあつてから、しばらくは、ぶじな日がつづきましたが、又ふたゝびききんがおとずれて來ました。すると又いせんと同じようなことがおこりました。ただこんどは、石を拾いに出

るにも戸があきませんでしたので、パンをくだいてそのくずを、おとしていつて、道しるべにしました

彼らが、家にかえろうとすると、小鳥がパンくずを食べてしまつていることを知りました。そこで、あんのじょう彼らは、道にまよつてしまいました。

次の日も次の日も見つかり次第いちごを食べながら森をさまよいました。しかし道に出ませんでした

三日目の朝のこと　彼らは一本の木にとまつている一羽の白い大きな鳥のなき聲に目をさましました

まもなくその鳥はとび上りましたので　彼らがそのあとをつけて行きますと、それは一軒の小さい家の屋根の上にとまりました。

（そ）れは、いつぷうかわつた家でした。壁はお菓子で作られて居り、屋根は、ブドウ入りの甘パンでふかれ、窓はさとう菓子で出來ていました。

ハンセルは屋根の一角をポクリとこぼち出來るだけ早口に食べました。グレテルは壁の一くれを片方の手にそして一枚の窓ガラスをもう一方の手にもつてかわるがわるにかぶりつきました。するとそのとき、戸口が開いて、わし鼻の、赤目の、みにくい老母がヒロツコリと顔を出しました。

子供たちは、びつくりしましたが、老母はやさしく言葉をかけました。

そして子供を、家の中え入れ、あたゝかいあげせんべいの夕御飯をあたえ、かわいらしい二臺の寢臺（しんだい）に入れてやりました。

ところが、この親切な老母というのが、實は小さい子供を料理して食べることのすきな、鬼ばばなのでした。目が赤目で、ものは、あまりはつきりとは見えませんでしたが、鼻はよくきいて、どんな遠い所の物でも、かぎ出すことが出來ました。

鬼ばばは、この遠くにいた森の子供たちを、かぎつけたので、例の白い鳥を送つて、自分の小屋え彼らを、さそい出して來たのでした。

朝になると、鬼ばばは、ハンセルをなやにとじこめました。しかしグレテルには、

「おきて用事をするんだよ、兄さんに食事を作つて

やりなさい、あの子が、よく太つてきたら、食べてやるんだから」

と申しました。かわいそうに幼いグレテルは、はげしく泣きました。しかし鬼ばばがたえず見はつているので、なやの戸をあけることも出來ず、さりとてハンセルを、ひとりぼつちにして、にげることも出來ませんでした。

（毎）日鬼ばばは、びつこをひきひき、なやのこうし窓の所え行き

「ハンセルよ、お前のゆびをお出し、どの位太つたか見よう」

と申しました。

ハンセルは、鬼ばばの目のうといことを、知つていましたので、指をさし出すかわりに、こうしからにわとりの骨をいつも出していました。

鬼ばばは、腹を立てましたが、なぜ、ハンセルがいまだに、やせているか、その理由がわかりませんでした。

四週間がすぎて、鬼ばばは、グレテルに

「お前の兄さんは、もう之以上ふとらぬだろうから今日はころして、料理する」と申しました、かまが、あつくなつてきたとき鬼ばばは、

「グレテルよ、もぐりこんで、火かげんを見てごらん」

と申しました。一たん、グレテルが中え入れば、鬼ばばは、彼女をしめこんで、やきころしてしまうたくらみなのでした。それとさとつたグレテルは、かまをみつめて

「どうして、私がは入れるものですか、かまがあまり大きくないんですもの」と申しました。

「何をばかな、ごらんよ、私でさえ、は入れるものといいながら、鬼ばばは、前えかがみました。

グレテルはすかさず前え押しました。すると鬼ばばは、前えのめつて、まつさかさまに、かまの中えおちこみました。そして向いなおらないうちに、戸をしめて、かぎをおろしてしまいました。

ものすごい鬼ばばの、うなり聲をあとにして、グレテルは、なやの方に、つつぱしり、ハンセルを出してやりました。

二人の子供は、さいごにと、鬼ばばの家に入つて行つてみました。すると部屋のすみずみに、しんじゅや、ほう石の一ぱいつまつているカメをみつけました。

もてるだけの、たからものを、かき集めて二人は森を通りぬけ、家路につきました。

夜にならぬうちに、子供たちは、きこりの家にたどりつきました。まま母は、もう死んで居りませんでした。

そして父親は、めつきりふけこんで、あけくれ、失つた子供のことを言つては、泣いていたのでした

だのに、その子供がなお生きていてくれたので、どんなにかよろこんだことでしよう。

もつてかえつたたから物のおかげで、それからというものは、もうたのしい暮しが出來るとこになつたのでした。

▲お約束の通り第三號を詩の特輯といたしました。この宗の扉の上には皆さんの詩が山のように積まれました、たんねんに一つ一つみせていただきました。

▲さぬきには、珍しい大雪です、その爲か、雪をうたつた詩が實にたくさんありました。が、どれもこれも、ちらちら、さらさら、白い雪、大雪小雪、などといつたものばかりでした。こんどからは、何をみても自分でなければみえないもの、そして自分でなければ、言い表せない表し方、つまりみなさん自身獨自なものをもつように心がけて下さい。

▲「こどもの國」は讀んでもらうと同時に作つてもらう雜誌です。何んでもいいから、どんどんお作り下さい。

▲之がみなさんのお手もとへとどくのは、雪ちらちらとけてばかりくする小春の頃かと思います、みんな五年生は六年へ四年生は五年へ新しい希望にふくらんでいることでしよう。木木の果のように、草花のつぼみのように、春はみなさん自身のものです(瀧口)

昭和二十二年三月八日印刷納本
昭和二十二年三月十二日發行
編輯兼發行人　丸亀市地方一九三　瀧口春男
發行人　丸亀市地方一六八　今井清太郎
印刷人　丸亀市地方一六一　印刷所　丸亀製版印刷所
丸亀市地方一九三
發行所　香川兒童文化研究會
振替口座德島一九一二二番
(¥4.50)